

## 脚下照顧

(自分の足下をよくよく見る)

【日蓮聖人の寿ぎ】

あけましておめでどうございませす。皆様にとりまして、健やかに新年をお迎えなされた事と大慶に存じ上げます。

弘安五年(一二八二年)といえは、日蓮聖人六十一才。その年の秋、十月十三日にお亡くなりになったのですが、その年の正月七日に、鎌倉の大信者である四条金吾殿(しじょうきんごどの)から、身延山の日蓮聖人のもとに、お餅と清酒が届けられました。日蓮聖人は早速筆を取り、お札の手紙をしたためられました：『満月の如くなる餅二十、甘露の如くなる清酒一筒給ひ候いた(おわん)ぬ。春のはじめの御悦(およろこび)は、月のみつるが如く、潮のさすが如く、草のかこむが如く、雨のふるが如くと思しめすべし』と。

つまり、満月の光は、昼間の様に明るく照らして、私達の心に何か安心感のようなものを涌かせてくれます。潮が満ちてくると、地球の躍動

を感じます。草が生えて伸びるのを見ていると、草木の命の力強さを思います。干天に慈雨の言葉の様に、日照り続きの時の雨ほど有り難いものはありません。月が満ちるにしても、潮がさしてくるにしても、草が茂り、雨が降ることも、全て旺盛な生命の営みであります。命が躍動している姿…。その命の躍動の中で、月は円満光の輝きを示し、潮は進展を意味し、草は繁栄をさし、雨は恵み、という意味合いになります。日蓮聖人は、この様な縁起の良い事例を引かれて、正月のめでたきことを示されました。

【修身とは、日々の生活を正すこと】

東洋では文化人として当然の常識とされた『四書五経(ししよごきやう)』という教えがあります。その中の『礼記(らいぎ)』に、『大学(※大学の呼び名はここに由来します)』という教えがあります。

その中で、学問というのは『修身・齐家・治国・平天下』と教えられています。

その学問の根本は『修身(しゅうしん)』です。修身とは、身を修めること。身を修めるとは、噛み砕いて言えば『日々の生活を正す事』です。

◎「学問は人間を変える。人間を変える様

な学問でなければ学問ではない。その人間とは他人のことではなくて、自分の事である。他人を変えようと思ったならば、先ず自分を変える事である」著・安岡正篤(陽明学者)氏の格言は真理だろうと思えます。

世の中を憂うなら、まず自分自身を修めなくてはなりません。

また人生に夢や志があるならば：

◎「2階にのぼりたいなあでは、まだまだダメである。何としても2階に登りたい。そんな熱意がほしこを生み出す」著・松下幸

之助(経営の神様 松下電器(現・パナソニック)創業者)氏は、これくらいの情熱、熱意で取り組みなさいという心持ちの深さを述べておられます。先人達の格言は実に深く、心に沁みます。

ちなみに『修身(身を修め)・齐家(家をととのえ)・治国(国をおさめ)・平天下(天下を平和にする)』とは：平和な世の中を望むなら、まず自分の行いを正しくしなければいけません。自分の生活態度がキチンとしていれば家庭内が安らかにあります。そして家庭がととのえば、自然と国がおさまってくるのではないでしょうか。また、国が治まれば平和な世の中になるものと思えます。

昨年末(十二月十六日)総選挙が終わ

り、リーダーの意向が気になるところですが、まずは私達一人一人が、自分の為すべき事をシツカリ為すところに、日本の未来や私達個人の未来が光り輝いてくるのではないのでしょうか？

【人事を尽くして天命を待つ】

厳しい言い方ですが、何かに思い悩んでいるうちは、まだ自分の全力を尽くしていないとも考えられます。自分の行動にキチンとした根拠がある人は、現状がどうあれ自分を信じて待つ事ができるはずですが、結果を急ぐのは、単なるわがままのかもしれない。各駅停車に乗車しているのに、どうして各駅に止まるの？と叫んでいる様なものです。

富山では冬に雪が降ります。たとえ今は雪が降っていても、四月には春がやってくることを私達は誰でも知っています。そう、日本には四季があります。人生にも山あり、谷あり、紆余曲折のあるのが私達の人生です。「この人生いつも順風満帆つがなく過ぎたい」と願うのは、私達の性なのですが、そんな人生は、誰にも、どこにもあり得ません。「寒い冬は嫌いだ。真夏のうだる暑さも嫌だ」と言って、一年中が過ごしやすい春や秋である事を望

む様なものです。卑近な例えですが、レストランなんかを考えてみて下さい。店は開店している時が全てではありません。一流店であれば仕込みに時間をかける。**下準備がいかに大切か**を物語っています。人生の春や秋を満喫する為にも、シツカリ冬を味わっておく必要があるのです。運が悪いと落ち込んだり、現実から逃避してはいけません。冬は自分をよく見つめる、自らを磨く大切な時期だと心得て、精進に励むことが大事なのでしょう。**冬の時期**

### 【笑顔は人間関係の潤滑油】

福が来たから笑うのではありません。実は、**笑う人の所に福が来る**のです。笑顔につきものなのが「ありがとう!」「幸せ!」「嬉しい!」「感謝しています!」などなど…その言葉には、温かくて、心が揺り動かされる前向きな言葉が添えられます。こういう気持ちの良人の所だからこそ、福がやってくるのではないのでしょうか? 「一年の計は元旦にあり」。広く言え

ば「正月（一月）にあり」です。

どうか、今年一年が皆さまにとりまして、素晴らしい物語を紡ぐ一年になります事を、心よりお祈り申し上げます。合掌

副住職 谷川寛敬

### 【お正月の雑学】



父親「あけましておめでとう」

家族「あけましておめでとう! ございます」

父親「お正月といえば、お屠蘇(とそ)を飲もう」

子供「うわーなにこれ!」

父親「これは昔から飲まれている」

子供「いつから? なにが入っているの?」

母親「うーん? そうだ、こういうのはお上人さんに聞きましょう」

一家「あけましておめでとう! ございます」

住職「あけましておめでとう! ございます」

母親「お屠蘇っていつから飲まれてい

たんですか?」

住職「唐時代の医者が、流行風邪予防のために作ったのが、おいしいと流行になったのが最初らしい。この医者が住んでいた家の名前が『屠蘇庵』とい

ったそう。屠蘇とは『鬼気を屠絶し人魂を蘇生させる』とか、1年間の自分の悪い行いや病気を殺して、新しい年に蘇るとも言われている。ここから一年中の邪気を払い延命長寿を願うために飲む酒となったらしいぞ。

日本では平安時代に伝わり、嵯峨天皇の頃に宮中の正月行事として始められ、江戸時代には一般に広まったそう。薬局で売っている『屠蘇散』には肉桂、大黃、百じゆつ、山椒、桔梗、乾姜な

どの薬草を合せたものが入っているよ。まあいずれにしても邪気を払い無病長寿を祈り、心身ともに改まろう、という願いを込めていただく、お正月ならではのセレモニー酒ではあるね(笑)」

子供「あつ、オミクジがある。お寺でもオミクジがあるの?」

住職「オミクジは神社ではなく、元々はお寺から始まったんだよ。天台宗の元三慈恵大師良源上人(1024-1101)が観音菩薩に祈念して偈文(げもん)を授かった観音籤(くじ)が起源と言われ

るのだよ。その方の住居跡が日蓮聖

人がおられた比叡山の定光院と同じ横川にあつて、古くは定心房といつて四季に法華経を論議することを始めたので『四季講堂』といわれているのだ。だから、日蓮宗にも全く無縁な話ではないね」

子供「へえ、そうなんだ」

住職「そうだ、せっかく来たからお年玉をあげよう」

子供「わーい! っつて、これお餅じゃん」

住職「鎌倉時代から年神様にお供えたお餅を分け与えるのが、お年玉のはじまりなんだよ。それが正月の訪問時に『お年始』『お年玉』と称して贈答物を届けるのが盛んになって

家人あてはお年始、子供へのおみやげはお年玉と使い分けるようになったとも言われているんだ」

子供「へえ…つて、でもやっぱり、おこづかいがいいなあ」

一同「あはははははははははは」

